29S-pm13

薬剤師 - 患者間のコミュニケーションに関する研究　第 1 報：コミュニケーション学習プログラムの構築とその学習効果

○仲山　千佳[1,2], 大嶋　耐之[1], 渥美　里枝[1], 加藤　文子[1], 新田　淳美[2]（[1]金城学院大薬, [2]富山大院薬）

【目的】高齢化の進展に伴い、在宅医療へのニーズが高まる中、薬剤師はこれまで以上にがんのような重篤な疾患を持つ患者に接する機会が増えるものと推察される。このため、薬剤師には今後さらに高いコミュニケーション能力が求められる。今回我々は、DIPEx-Japan「がん患者の語りデータベース（以下 DB）」をモチーフに新たな模擬患者参加型学習（以下 SP 学習）プログラムを構築し、これを用いて薬剤師のコミュニケーション能力向上に向けた学習を実施し、その学習効果について検証を行った。

【方法】①学習用シナリオ作成：「がん患者の語り DB」に集約された患者の声をもとに作成した。②SP 学習の実施：薬局薬剤師 54 名を対象に、作成したシナリオを用いて SP 学習によるコミュニケーション学習会を実施した。③学習効果の検証：薬剤師のコミュニケーションに関する意識と行動のチェックシート（30 項目）を作成し、学習前・後・1 ヶ月後に調査を行い、Student's t-test を用いて分析した。

【結果・考察】シナリオは、乳がん・前立腺がんの実際の患者に即した全 6 例を作成した。学習プログラムでは、作成したシナリオを用いた SP 学習を中心に、スモールグループディスカッションや逐語録討論を盛り込んだ新たな学習プログラムを構築し、学習会を実施した。その結果、学習参加者が回答したチェックシートを学習前と 1 ヶ月後で比較したところ、殆どの項目で薬剤師の意識と実際の行動に有意な向上がみられた。以上のことから、本学習が薬剤師のコミュニケーション能力向上に有用であることが示唆された。今後、本取り組みを改良、継続していくことで、薬剤師のコミュニケーション能力向上に大きく寄与できるものといえる。（本研究は、平成 23 年度科学研究費助成事業の助成を受けて実施した。）